

『あくりちゃんのおはなし ～48650 物語～』

作： 進行豹（キュートレイン・ネットワーク）

三次(みよし)の町には、一両の蒸気機関車があります。
名前は、48650 です。

とても真面目で働き者。
つまりは、ごくごく平凡な蒸気機関車でしたが、
たったひとつだけ、他の蒸気機関車たちと違うところがありました。

48650 が「ぼーーーーーっ」と長い汽笛を鳴らしますと、
ホームにいるお客さんも、駅員さんも、
それどころか機関士さんも機関助士さんも。

みいんな、にこっと笑顔になって、48650 の汽笛に聞き惚れるのです。

それほど汽笛が美しい——48650 は、そんな蒸気機関車でした。

蒸気機関車というのは、
お湯を沸かすと出てくるゆげ——
蒸気力で走る鉄道の車両です。
汽笛も、蒸気で鳴っています。

人が、息で笛を吹くように、
蒸気機関車も、蒸気で汽笛を吹くのです。

ですから、汽笛を鳴らす、という言い方の他に。
吹鳴（すいめい）——吹いて鳴らす、なんていう言葉もあります。

石炭を燃やして、お湯をわかして、シュッシュッポッポ。
日本に鉄道が走りはじめた最初のことから、
蒸気機関車は、日本のすみからすみにまで、
たくさんの人や荷物をはこびました。

48650 も、そんな中の一両として、
「ぼーっ、ぼーっーっ」とご自慢の汽笛を吹鳴しながら、日本の広くを走り回りました。

大阪で生まれ、名古屋でデビュー。
一番最初にならした汽笛は、喜びに満ちあふれたものでした。

それから新潟、石川、福島と次々にお引っ越しして、
雪の中、汽笛を高らかに響かせながら、たくさんたくさん走りました。

戦争が始まる少し前、
48650 は島根の津和野に引っ越ししました。

戦争の間も一生懸命、津和野から広島に、山口に——
いろんなところで、人を、荷物を運びました。

48650 の汽笛が「ぼーっ」と鳴り響くたび、乗客は、駅員さんは、機関士さんは、機関助士
さんは——
勇気づけられた顔になり、「うん」と頷いたものでした。

戦争が終わると、今度は山口、下関にお引っ越ししました。
下関でも 48650 は一生懸命走りましたが——
時代は、だんだん、48650 の走る線路を短く短くしていきました。

『無煙化』という運動が起こったからです。
無煙化とは、『けむりをなくす』という意味です。

蒸気機関車は、石炭を燃やして走ります。

だからもくもく、煙が出ます。

煙は、洗濯物を真っ黒にします。

乗っているお客さんだって、窓をあけたままトンネルに入ってしまうでもしたら、もうてきめんに真っ黒になります。

煙の中に混じる火の粉は、火事を起こしてしまったことだってあるのです。

だから、煙を出さない、煙が少ない鉄道車両——

モーターやディーゼルエンジンではしる機関車や、電車、気動車に鉄道車両をおきかえよう。

そうした運動が、日本全国でいっぺんに起こりました。

無煙化の大嵐の中、48650 は三次にお引越しすることになりました。

福塩線（ふくえんせん）や芸備線（げいびせん）、三江線（さんこうせん）を、毎日毎日、一生懸命走りました。

ご自慢の汽笛をポッポーとならし、安全に正確に、ダイヤを守って人々の暮らしをささえました。

48650 には、たくさんの姉妹がいました。

8620 や、18688、58654 など——

姉妹たちはみんな、86 の数字をナンバーにもつ、「ハチロクがた」という機関車でした。

48650 が走り続ける間にも、

姉妹達は、どんどん引退していきました。

引退すると、普通、車両は廃車になります。

スクラップにされ、壊されてしまうのです。

姉妹達は、頑張り続ける 48650 のために、
部品を遺して行ってくれました。

姉妹達の遺してくれたいろんな部品を、
部品交換のそのたびに、48650 は自分の一部にしていきました。

そうするうちに、48650 には魂がやどりました。
大事に大事にされているものには、『つくもがみ』という魂がやどるのです。



48650 のつくもがみは、かわいい着物を着ておりました。
着物には、紅葉（もみじ）の柄がありました。

尾関山（おぜきやま）の紅葉の中を、汽笛を鳴らして走るのが、
48650 の、一番のお気に入りだったからです。

48650 のつくもがみは、かみさまというには弱々しく、
なんにもできないつくもがみでした。

だけれど、自分を大事にしてくれた——
つくもがみにしてくれた——三次の機関庫のひとたちを、
大事に大事に思っていました。

だから毎日毎日欠かさずに。
「おはようございます」
「ご安全に」
「おつかれさまでした」
と、みんなに声をかけていました。

するとある日、
つくもがみの声に足を止めてくれる機関士さんがおりました。
もうおじいさんの機関士さんでした。

うれしくなったつくもがみは、
おじいさんの機関士さんに、毎日毎日たくさんたくさん話しかけました。

毎日毎日たくさんたくさん話しかけるうち、おじいさんの機関士さんは、つくもがみの声を
きけるようになり、姿をみれるようになりました。

「なんてかわええ女の子じゃろう」
おじいさんの機関士さんはいいました。
「まるであぐり姫さんのようじゃ」

お話できてうれしくて、つくもがみは聞きました。

「あぐり姫って、どなたですか？」

「あぐり姫さんは、三次のゆかりの姫様じゃ」

おじいさん機関士さんからあぐり姫のことを聞いたつくもがみは、あぐり姫みたいになりたいな、と思いました。

けれど、立派で綺麗なあぐり姫に、自分は全然とどいてないともわかっていました。

だから、「あぐり」に足りてない、てんてんが無い、

「あくり」だなんて、自分のことを思いました。

そう話したら、おじいさん機関士さんは大喜びしてくれました。

「あくりちゃん。48650 のつくもがみさん。

こいつのことを、ずうっと守ってやってくれ」

それで、つくもがみに名前がつきました。

つくもがみは、「あくりちゃん」になりました。

あくりちゃんは人間のことを、人間のくらしのことを、だんだんと細かく知るようになっていきました。

そのうち、人間には「苗字（みょうじ）」と「名前」とがあることに気がつきました。

「わたしも苗字が欲しいです」

おじいさん機関士さんにお願いすると、

おじいさん機関士さんは、少し考えて言いました。

「48650 の汽笛は、ことその他美しい汽笛だ。

だから、美しい笛、とかいて『みてき』。

『美笛（みてき）あくり』でどうだろう」

「美笛！ みてき！ 美笛あくり！！」

あくりちゃんは大喜びです。
その瞬間から、あくりちゃん、
「美笛あくり」になりました。

つくもがみをあくりちゃんに、美笛あくりにしてくれた
おじいさん機関士さんは、やがて退職していきました。

三次の機関庫にいた蒸気機関車の仲間たちも、
どんどん引退していきました。

気がつけば、48650 は三次で最後の蒸気機関車になっていました。

そうして、そのときがやってきます。

1970 年。12 月 9 日。
東福山と三次とを往復する列車が出発していきました。

それが、48650 とあくりちゃんが、お客さんを乗せて走った最後の日でした。

お客さんを乗せなくなっても、入換（いれかえ）——機関車や貨車の順番を並べ換えるお仕
事や、臨時列車を走らせるお仕事を、がんばっていこうと、あくりちゃんは思っていま
した。

けれど、ほんの一週間もたたない日。

1970 年 12 月 15 日。

マヤ、という、レールのゆがみや傷などを検車するための車両を引っ張って——48650 とあ
くりちゃんとの、長い長い旅が終わりました。

最後の旅は、口羽駅（くちばえき）から三次駅まで。
三江南線（さんこうなんせん）の旅でした。

「これからもずっと、たくさんの妹たちが走るレールを検査して、守る。
マヤをひっぱるお仕事が、わたしの最後のお仕事で、
ほんとにほんとうに嬉しいな」

お別れの、感謝の汽笛は、長く、遠く——
とても美しく鳴り響きました。

そうしてそれが、蒸気機関車が三江線の線路を走った、おしまいのときになりました。

年が明けた三月。
48650 は引退しました。

現役時代に走った距離は 250 万キロ以上。
地球を 62 周できてしまう長さです。

それだけの大活躍をした 48650 です。
むぎむぎと解体するのはもったいない、という声があがりました。
三次の町の人たちは、それはそうだと納得しました。

そこで、48650 は保存をされることになりました。

三次文化会館にお引っ越しして、
ちょっとだけの線路と、綺麗なお屋根とをもらい、
のんびり毎日を過ごしました。

保存をされてすぐのころには、
たくさんの人たちが 48650 に会いに来てくれました。

引退をしたおじいさん機関士さんは、毎日毎日、
48650 を磨きにきてくれました。

こどもたちは 48650 を遊び場にして、大人達は 48650 を記念写真のモデルにしました。

たくさんのあたたかな笑顔につつまれて、あくりちゃんも毎日毎日が幸せでした。

けれど——時間は残酷です。

おじいさん機関士さんがいなくなり、48650の周りに集まるひとたちも、だんだんと少なくなっていました。

ピカピカだった48650にも、少しずつ錆が浮いてきました。
全部きっちり動いていた逆転器ハンドルや加減弁とも、
だんだんと、動きが渋くなってきました。

あくりちゃんは、必死になって叫びました。
48650の前にたって、
「忘れないで、このこを見て、みがいてあげて」
と、一生懸命うったえました。

けれども、誰も、その声を聞いてくれません。

48650の動かなくなる部分が増えていくにつれ、
あくりちゃんもだんだんと——少しずつ動けなくなっていました。

やがて、あれほどの自慢だった汽笛が、鳴らなくなってしまいました。
あくりちゃんの声も出なくなりました。

それでも、あくりちゃんは48650の前に変わらず、立ち続けました。

もう誰も、48650を見てくれません。
もう誰も、あくりちゃんを見つけてくれません。

(だれか、見て。わたしを見て。48650を見て)

そう願って。ひたすらに祈って。

雨の日も、風の日も、雪の日も、ずうっとここに立ち続けました。

あくりちゃんは、もう、ボロボロでした。

つかれてしまって、さみしくて。

48650 は錆だらけで、ついに穴まで空いてしまって。

(もうだめかも)

と、くじけてしまいそうでした。

そこに、一人の男の人がやってきました。

(助けて、助けて)

あくりちゃんは、出せない声で、一生懸命に叫びました。

けれど、出せない声が、男の人に届くはずもありません。

あくりちゃんの姿も、、男の人には見えていないようです。

男の人は、そのまま去っていきました。

(ああ——)

あくりちゃんは、ついにしゃがみ込んでしまいました。

しゃがみこめば、力がどんどん抜けていきます。

(もう動けない。もうだめだ)

そう思って、膝を抱えてうずくまって——

どのくらいの時間がたったのでしょうか？

じやり、っと足音が聞こえました。

なんだろうと顔をあげると、さっきの男の人です。

箒とちりとりを持っています。

「こんなに汚れて、かわいそうに」

男の人は、48650の周りを掃除してくれます。

あくりちゃんはとっても嬉しくなりました。

もう出ない声でなんどもなんども

(ありがとう)

とお礼を言いました。

男の人に、やっぱり声はとどかないようで、

あくりちゃんには気がつきもせず、帰って行ってしまいました。

男の人は。

次の週も箒とちりとりをもってやってきてくれました。

次の次の週も。

その次の週も。

毎週毎週。男の人は掃除をしてくれるようになりました。

やがて、男の人のまわりに、別の人も来てくれるようになりました。

最初は男の人の箒だけだった掃除道具が、

ペンキに、ハケに、スクレイパーに――

整備道具に変わってきました。

三次の町の偉い人が、整備を許可してくれたのです。

そのうちに、電気と水も使えるようになりました。

空いてしまった穴はパテでふさがれて、綺麗に塗装されるようになりました。

48650が少しずつ輝きを取り戻しはじめると、

三次の町の外からも、いろんな人が来てくれるようになりました。

男の人たちの集まりには、『三次 SL 保存会』という名前がついたようでした。

保存会の人たちと、町の外からきた人たちは、
少しずつ少しずつ 48650 を整備して、もう動かなくなった部品を、プレゼントして、交換
をしてくれました。

逆転器ハンドルが、加減弁てこが、再び動くようになり。
そうして、ついに――

汽笛が響くようになったのです！

「うれしい！　うれしい！　ありがとう！！！」
また出るようになった声で、あくりちゃんはみんなにお礼を言いました。

ぽーーーーーっ！！

高らかになった再びの汽笛は、
遠く、遠く、どこまでだって鳴り響きました。